

青年期の信頼感形成に及ぼす心理学的要因

菅原正和*・田村和香奈*・嶋野重行**

(2004年11月30日受理)

I. 問題と目的

現代日本の教育現場には、いじめや不登校、学級崩壊、学力低下等多くの問題が山積している。かかる問題の原因は1つではなく多岐にわたるが、教師と生徒間、あるいは生徒間同士の対人関係が急速に変化してきており、相互の信頼感の全体的低下が大きく関わっている可能性がある。信頼関係は簡単に築かれるものではなく、誕生から日常生活の様々な場面や対人関係を通して徐々に構築されていく。しかしながら、信頼感の確立の基礎となる発達心理学的要因に何らかの問題があるとすれば、信頼関係の構築はより一層難しくなると考えられる。これまでの信頼感研究は、主に2つの理論的背景からなされてきた。1つは Erikson による発達漸成理論からの基本的信頼、もう1つは Rotter を中心とする社会的学習理論からの対人的信頼である。

Erikson (1959) のいう基本的信頼とは、“生後1ヵ年の経験から獲得される自分自身と世界に対する1つの態度”であり、他人に対しては一般に筋の通った信頼を、自分自身に対しては信頼に値する感覚を意味する。つまり、信頼感の原点は必要物を供給してくれる外的存在が常に同じで安定しており、連続性を有していること、様々な衝動に対処する自己の適応能力を信頼することにある。このように、基本的信頼には自己と他者（幼い時期には主に保護者）への2つの方向が仮定される。その後、新井・宮腰・後藤 (1995) らの研究により、他者に対する安定した信頼感の形成が自己に対する信頼につながるという、信頼感獲得の順序も指摘されている。さらに、Erikson (1959) は、信頼感の獲得について、必要なのは盲目的な信頼の獲得ではなくて、“基本的信頼感が、基本的不信感を上回るバランスを保つような永続的パターンを確立する”ことであると述べている。また、Erikson (1955) は「否定的」な観念（基本的不信、疑惑など）は生涯を通じて「肯定的」観念のきわめて動的な対応部分であり続けるとも述べ、基本的信頼を脅かさない程度の基本的不信の獲得は反対に必要なであるともとらえられる。

Rotter (1967) は、対人的信頼を“個人あるいは集団が、他の個人や集団の用いた言語・約束・話し言葉や書き言葉によって表された陳述に対し、それに依ることが可能であるという期待”と定義した。社会的学習理論の立場から信頼感をとらえた Rotter の新しい観点は、信頼感獲得の能動性と可変性を強調している。つまり、前述した Erikson の基本的信頼の概念が、個

* 岩手大学教育学部

** 岩手大学教育学部附属養護学校

人を他者（たとえば、母親）から信頼を受け取る存在（相対的享受者）ととらえているのに対し、Rotterは対人的信頼の獲得にはより能動的な側面が仮定され、生涯にわたって変化する可能性のあることを指摘している。これは、ある一定の時期以内に、不幸にして基本的信頼が成立しなかった場合でも、広い意味での信頼感には修復の可能性があることを示唆しているとも考えられる。対人的信頼の意味するところは、研究者間でまちまちであり一貫していない。たとえば、CynthiaとWalter（1982）は、対人的信頼感を“協調や相互依存を要求するすべての社会場面”における関係、Giffin（1967）は“疑いの存在し得るような不安定で危険な状況”における関係、ととらえている。それに対し、行動面、認知・感情面の2領域から対人的信頼感をとらえようとしたRotenberg（1994）は、対人的信頼感を複数次元から検討している。天貝（1999）はEriksonとRotterの両概念を総合して、信頼感を「人や自分自身を安心して信じ、頼ることができるという気持ち」と定義している。また、信頼感の基盤は乳幼児期に獲得されるが、その獲得状態は不変ではなく、自己への問い直しがなされる青年期において再獲得される可能性があるとし、信頼感を「自分への信頼」「他者への信頼」「不信」の3側面から測定することで、青年期前期から老年期にかけての信頼感の変化を検討している。

信頼感に影響を及ぼしていると思われる要因の中に、内的ワーキングモデルと共感性がある。内的ワーキングモデル（internal working models）とは、Bowlby（1969, 1973, 1980）によって提唱された愛着に関する表象モデルであり、他者と自己の関係において各個人が持つ認知的枠組を指す。そして、各個人はこれらのモデルを現実世界のシミュレーションモデルとして使用することにより、外界からの情報を処理して生活上の様々な出来事を認知したり、安全感を得るのに有効な自分の行動のプランを作成したりすると考えられている。この内的ワーキングモデルは、発達の過程で出会う様々な愛着対象との間でのアタッチメントに関連した出来事を要素として、個人の内部に体制化していく。内的ワーキングモデルの形成については、乳幼児期、児童期および思春期という重要な発達過程において徐々に形成されていく。生後6ヶ月～5歳前後が内的ワーキングモデル形成の最も敏感な時期であり、その後もこのような敏感性を次第に減じながら、少なくとも15歳までは可塑性は持続すると考えられている。青年期における愛着要求の存在については、清水（1979）や戸田・松井（1985）の報告がある。子どもは乳幼児期に最初の愛着対象である母親に対して愛着を形成し、そこで形づくられた他者に対する安全感をベースに子どもはその後様々な対象に出会い、それぞれの対象に対してふさわしい様式で愛着を形成していく。また、この時期に形成された内的ワーキングモデルは、一生を通して比較的变化することなく持続する傾向があるとされる。高橋（1968a, 1968b, 1970, 1980）は、女子中学生から女子大学生、および男子大学生を対象とした一連の横断研究の結果、いずれの年代においても愛着要求が存在しており、さらに複数の対象にその要求は向けられていると報告している。愛着とは自立の反対概念ではなく（即ち、年齢と共に減少したり消滅したりするものではなく）、自分の必要に応じて適切な対象にふさわしい様式で愛着を向けることが自立の発達課題であると論じている。内的ワーキングモデルのタイプについてAinsworthら（Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. & Wall, S., 1978）は、個人差を実験的に把握する方法として、ストレンジ・シチュエーション法を考案し、乳幼児期の愛着パターンを安定型（secure）、アンビバレント型（ambivalent）、回避型（avoidant）の3タイプに分類した。この内的ワーキングモデルの個人的差異が、その後の対人関係のスタイルやパーソナリティの形成に発展していくと考えられる。Hazan, C.とShaver, P.（1987）は、現在の自己にあてはまる愛

着の分類と想起した過去の愛着の質とが関わりがあり、更にそれらと現在の対人関係スタイルや社会的適応性との関連性があることを指摘している。

次に、共感性は個人の他者理解を深めるとともに、個人間の結びつきを強めたり、対人関係や社会生活を円滑にする重要な役割を担ったり対人信頼感を構築するためには、必須要因であると考えられる。岩脇（1980）によると、共感性は当初美学の問題として導入され、やがて心理療法過程や対人認知、社会的技能の関係で検討されてきた。また、Mussen & Eisenberg (1980)、Hoffman (1981, 1982) は、向社会的行動 (pro-social behavior) の動機づけ要因の一つとしても取り扱っている。共感性は人間行動の幅広い領域に関与しているが、その取り扱い領域の多様さ故、必ずしも一貫した定義づけがされていない。共感性の研究の多くが、感情的アプローチと認知的アプローチのどちらかに分類されている。認知的側面に力点をおいた定義の中に Dymond (1949) の、共感性は「他者の思考・感情・行為の中に自己を置き、その視点から外界を構成すること」というのがある。一方、共感性と社会的洞察力とは混同されることがあるので、感情面にも注目し共感性を知覚した感情反応に対する反応者の代理的感情反応 (vicarious affective response) であるとする考え方もある。それらの共感性研究には Krebs (1975) の血圧や心拍数の変化等の生理的プロセスに注目するもの、首藤 (1985) の顔の表情を分析する方法がある。Mussen ら (1980)、Hoffman (1982)、浅川・松岡 (1987) は、共感性を認知と感情に分離せず両側面を伴うとする。加藤・高木 (1980) は Mehrabian と Epstein の尺度項目に手を加え、共感性を多面的に検討することが可能な情動的共感性尺度を作成した。因子分析結果から感情的アプローチに沿った内容を持つ3つの下位尺度 (1. 感情的暖かさ、2. 感情的冷淡さ、3. 感情的被影響性) を想定している。

以上のような先行研究を踏まえて、本研究では、青年期における大学生を対象に信頼感とそれに影響を及ぼしていると思われる、内的ワーキングモデルと情動的共感性の関連について分析検討していく。

II. 方 法

【調査対象】 国立A大学4学部の学生173名。

【調査時期】 2003年6～7月。

【調査方法】 学生173名に、信頼感尺度、内的ワーキングモデル尺度、情動的共感性尺度に対する回答を無記名で依頼した。信頼感尺度 (天貝, 1995, 1997) は対人的信頼感を多次的に測定するための尺度で、「自分への信頼」「他人への信頼」「不信」の3つの下位尺度で構成されている。質問項目に対する回答形式は、5件法 (5: あてはまる、4: ややあてはまる、3: どちらともいえない、2: ややあてはまらない、1: あてはまらない) を用いている (Table 1)。内的ワーキングモデル尺度は、戸田 (1988) によって開発され、個人が他者と自分の関係をどのようなものとして捉えているのかについて、アタッチメント理論の観点から測定する尺度である。「安定型 (secure)」、「アンビバレント型 (ambivalent)」、「回避型 (avoidant)」の3つの下位尺度で構成されており、質問項目に対する回答形式は5件法 (5: あてはまる、4: ややあてはまる、3: どちらともいえない、2: ややあてはまらない、1: あてはまらない) を用いた (Table 2)。

情動的共感性尺度は、加藤・高木 (1980) によって開発され、他者の情動や感情に対する共感

性を測定するための尺度である。「感情的温かさ」「感情的冷淡さ」「感情的被影響性」の3つの下位尺度から成る。質問項目の形式は、5件法（5：そうだと思う、4：どちらかといえばそうだと思う、3：どちらともいえない、2：どちらかといえばちがうと思う、1：ちがうと思う）を用いて回答を求めた（Table 3）。

Table 1 信頼感尺度

-
1. 私は、自分自身を、ある程度は信頼できる。
 2. 私は自分の人生に対し、何とかやっていけそうな気がする。
 3. 私は、自分自身が、信頼に値する人間だと思う。
 4. 自分自身について、今は実現していないことでも、いつかこうなるだろうと信じられることは多い。
 5. 私は、自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信をもっている。
 6. 私は、決して他人にはとってかわることの出来ない存在であると思う。
 7. これまでに会ったほとんどの人は私によくしてくれた。
 8. 一般的に、人間は信頼できるものだと思う。
 9. これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる。
 10. 状況が許せば、たいいてい人間はお互いに正直に、かつ誠実に関わりあいたいと思っているだろう。
 11. 私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う。
 12. 周りのほとんどの人は私を信頼してくれているだろう。
 13. 私は現実に信頼できる特定の他人がいる。
 14. 無理をしなくてもこの先の人生でも、私は信頼できる人と出会えるような気がする。
 15. 今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う。
 16. 所詮、周りは敵ばかりだと感じる。
 17. 自分で自分をしっかり守っていないと、壊れてしまいそうな気がする。
 18. 過去に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが怖くなっている。
 19. 気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込もうとするだろう。
 20. 私はなぜか人に対して疑り深くなってしまう。
 21. 今は何かと話せても、他人など全く当てにならないものである。
 22. 人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう。
 23. 相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるときだ。
 24. 私の地位や立場が変われば、私自身も今とは全く違う人間になるだろう。
-

Table 2 内的ワーキングモデル尺度

-
1. 私は知り合いが得意やすい方だ。
 2. 私はすぐに人と親しくなる方だ。
 3. 私は人に好かれやすい性質だと思う。
 4. たいいてい人は私のことを好いてくれていると思う。
 5. 気軽に頼ったり頼られたりすることができる。
 6. 初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある。
-

7. 人は本当はいいやながら私と親しくしてくれているのではないかと思うことがある。
8. 時々友達が、本当は私を好いてくれているのではないかとか、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある。
9. 自分を信用できないことがよくある。
10. あまり自分に自信がもてない方だ。
11. 私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から疎まれてしまう。
12. ちょっとしたこと、すぐに自信をなくしてしまう。
13. 人に頼るのは好きではない。
14. 私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやって行けると思う。
15. あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりするとイライラしてしまう。
16. あまり人と親しくなるのは好きではない。
17. 人は全般的には信用できないと思う。
18. どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう。

Table 3 情動的共感性尺度

1. 私は映画を見る時、つい熱中してしまう。
2. 歌を歌ったり、聴いたりすると、私は楽しくなる。
3. 私は愛の歌や詩に深く感動しやすい。
4. 私は動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる。
5. 私は身寄りのない老人をみると、かわいそうになる。
6. 私は人が冷遇されているのを見ると、非常に腹が立つ。
7. 私は大勢の中で一人ぼっちでいるのを見ると、かわいそうになる。
8. 私は贈り物をした相手の人が喜ぶ様子をみるのが好きだ。
9. 私は会計事務所に勤務するよりも、社会福祉の仕事をする方がよい。
10. 小さい子どもはよく泣くが、かわいい。
11. 私は人がうれしくて泣くのをみると、しらけた気持ちになる。
12. 私は他人の涙を見ると、同情的になるよりも、いらだってくる。
13. 私は不幸な人が同情を求めるのを見ると、いやな気分になる。
14. 私は友人が悩みごとを話し始めると、話をそらしたくなる。
15. 私はまわりの人が悩んでいても平気でいられる。
16. 私は人がどうしてそんなに動揺することがあるのか理解できない。
17. 私は他人が何かのことで笑っていても、それに興味をそそられない。
18. 人前をはばからずに愛情が表現されるのを見ると、私は不愉快になる。
19. 私はまわりが興奮していても、平静でいられる。
20. 私は映画を見ていて、まわりの人の泣き声やすすりあげる声を聞くと、おかしくなることがある。
21. 私は感情的にまわりの人からの影響をうけやすい。
22. 私は友人が動揺していても、自分まで動揺してしまうことはない。

23. 私は他人の感情に左右されずに決断することができる。
24. まわりの人が神経質になると、私も神経質になる。
25. 私は悪い知らせを人に告げに行くときには、心が動揺してしまう。

Ⅲ. 結 果

本調査の有効回答は157名、有効回答率は90.7%であった。信頼感尺度に関して先行研究においては、3因子構造であるとされている。そこで、因子数を3つに指定して因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した。その結果、3因子（固有値1.00以上）が抽出された。それぞれの下位項目は、第1因子には10項目（寄与率27.1%）、第2因子には5項目（寄与率13.4%）、第3因子には7項目（寄与率7.1%）が含まれ、これらを「不信」、「自分への信頼」、「他者への信頼」の3つのタイプに分類した（Table 4）。

内的ワーキングモデル尺度についても同様に、先行研究に従い、因子数を3つに指定して集計結果に因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した。その結果、3因子（固有値1.00以上）が抽出された。それぞれの下位項目は、第1因子には6項目（寄与率25.2%）、第2因子には6項目（寄与率16.2%）、第3因子には5項目（寄与率12.5%）が含まれ、これらを「安定型」、「アンビバレント型」、「回避型」の3タイプに分類した（Table 5）。情動的共感性尺度については、先行研究に従い因子数を3つに指定して因子分析（主因子法、バリマックス回転）を実施した結果、抽出された3因子（固有値1.00以上）のそれぞれの下位項目は、先行研究とは異なる項目で構成されていた。そのため因子負荷量.40未満の項目を除外し、16項目において再び因子分析を行った。その結果、第1因子には7項目が含まれ（寄与率24.2%）、内容は他者に対する否定的な感情反応に関する項目で構成されている。（例「12. 私は他人の涙を見ると、同情的になるよりも、いらだってくる。」）よってこの因子を「冷淡さ因子」と命名した。第2因子は、他者に対する思いやりや同情に関する4項目から構成されているので（寄与率12.5%）、これを「同情因子」と命名した。第3因子には5項目（寄与率10.3%）が含まれ、その内容は「他者の感情に反応し動揺する傾向」を表すものであったので、この因子を先行研究にある「被影響性因子」と命名することにした（Table 6）。以上の結果から抽出された因子について以下の分析を行った。

- 1) 信頼感3因子における男女差：信頼感の3つの因子について男女差をみるために、t検定を行った。しかし、どの因子においても男女差はみられなかった（Table 7）。
- 2) 相関：信頼感と内的ワーキングモデルの因子ごとの相関を調べた。その結果、「不信」と「アンビバレント型」の間に高い相関が認められた。また、「自分への信頼」と「安定型」、「自分への信頼」と「アンビバレント型」、「他者への信頼」と「安定型」、「不信」と「回避型」の間に弱い相関がみられた（Table 8）。同様に、信頼感と情動的共感性においては、「他者への信頼」と「冷淡さ」、「他者への信頼」と「同情」、「不信」と「冷淡さ」の間に弱い相関がみられた（Table 9）。
- 3) 分散分析：内的ワーキングモデルに関して平均値と標準偏差を用い、「安定」得点と「アンビバレント」得点「回避」得点のそれぞれにおいて、1/2標準偏差（1/2SD）でH群、M群、L群に分類し、対人信頼感の「不信」、「自分への信頼」、「他者への信頼」得点とで分散分析を行った。その結果、有意な関係が認められたものについて、フィッシャーPLSD法による多

重比較を行った。「自分への信頼」については、「アンビバレント型」得点のL群は、H群、M群と比べて、有意に高かった。「不信」については、「アンビバレント型」のH群は、M群、L群に比べて有意に高く、M群はL群に比べて有意に高かった。また、「回避型」のL群は、H群、M群に比べて有意に低かった (Table 10)。同様、情動的共感性についても平均値と標準偏差を用い、「冷淡さ」得点、「同情」得点、「被影響性」得点のそれぞれにおいて、1/2標準偏差 (1/2SD) でH群、M群、L群に分類し、対人信頼感の「不信」、「自分への信頼」、「他者への信頼」のそれぞれの得点に分散分析を行った。いくつかの部分で有意な関係が認められたので、フィッシャーPLSD法による多重比較を行った。その結果「他者への信頼」については、「冷淡さ」のL群は、M群、H群よりも有意に高く、また「同情」のH群、M群は、L群より有意に高かった。「被影響性」のL群は、H群に比べて有意に高かった。「不信」については、「冷淡さ」のH群は、M群、L群に比べて有意に高く、M群はL群に比べて有意に高かった。次に、「同情」のH群は、M群に比べて有意に高かった。「自分への信頼」については、どの因子においても有意な差はみられなかった (Table 11)。

Table 4 信頼感尺度の因子分析結果

	因子1	因子2	因子3
気をつけていないと、人は私の弱みにつけ込もうとするだろう。	0.730	0.005	-0.135
相手が自分を大切にしてくれるのは、そうすることによって相手に利益があるときだ。	0.710	0.020	-0.189
今は何かと話せても、他人など全く当てにならないものである。	0.701	-0.045	-0.150
私はなぜか人に対して疑り深くなってしまう。	0.689	-0.162	-0.014
所詮、周りは敵ばかりだと感じる。	0.683	-0.072	-0.323
自分で自分をしっかり守っていないと、壊れてしまいそうな気がする。	0.651	-0.154	0.122
過去に、誰かに裏切られたりだまされたりしたので、信じるのが怖くなっている。	0.617	-0.067	-0.159
今心から頼れる人にもいつか裏切られるかもしれないと思う。	0.590	0.131	-0.187
私の地位や立場が変われば、私自身も今とは全く違う人間になるだろう。	0.586	-0.081	0.194
人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう。	0.454	0.061	-0.023
私は、自分自身を、ある程度は信頼できる。	-0.027	0.778	0.100
私は自分の人生に対し、何とかやっていけそうな気がする。	-0.045	0.748	0.217
私は、自分自身が、信頼に値する人間だと思う。	0.021	0.693	0.177
私は、自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信をもっている。	-0.099	0.615	0.098
自分自身について、今は実現していないことでも、いつかこうなるだろうと信じられることは多い。	0.027	0.609	0.180

状況が許せば、たいてい人間はお互いに正直に、かつ誠実に関わりあいたいと思っているだろう。	-0.035	0.116	0.738
私は現実に信頼できる特定の他人がいる。	-0.114	0.071	0.649
これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる。	-0.347	0.225	0.645
無理をしなくてもこの先の人生でも、私は信頼できる人と出会えるような気がする。	-0.202	0.334	0.643
一般的に、人間は信頼できるものだと思う。	-0.325	0.207	0.579
私は多少のことがあっても、今の信頼関係を保っていけると思う。	-0.135	0.089	0.565
これまでに会ったほとんどの人は私によくしてくれた。	-0.263	0.201	0.542
固有値	5.970	2.949	1.561
寄与率(%)	27.1	13.4	7.1

因子1：不信 因子2：自分への信頼 因子3：他者への信頼

Table 5 内的ワーキングモデル尺度の因子分析結果

	因子1	因子2	因子3
私はすぐに人と親しくなる方だ。	0.870	0.036	-0.095
私は知り合いがでしやすい方だ。	0.803	-0.008	-0.077
初めて会った人とでもうまくやっていける自信がある。	0.798	-0.072	-0.014
私は人に好かれやすい性質だと思う。	0.715	-0.115	-0.081
気軽に頼ったり頼られたりすることができる。	0.698	-0.034	-0.166
たいていの人は私のことを好いてくれていると思う。	0.690	-0.182	0.039
時々友達が、本当は私を好いてくれていないのではないかと、私と一緒にいたくないのではと心配になることがある。	-0.006	0.789	0.010
人は本当はいやいやながら私と親しくしてくれているのではないかとと思うことがある。	-0.002	0.754	0.025
ちょっとしたことで、すぐに自信をなくしてしまう。	-0.157	0.731	-0.047
自分を信用できないことがよくある。	-0.143	0.666	0.125
私はいつも人と一緒にいたがるので、ときどき人から疎まれてしまう。	0.136	0.659	-0.051
あまり自分に自信がもてない方だ。	-0.356	0.624	0.031
あまりにも親しくされたり、こちらが望む以上に親しくなることを求められたりすると、イライラしてしまう。	-0.042	0.007	0.729
どんなに親しい間柄であろうと、あまりなれなれしい態度をとられると嫌になってしまう。	-0.076	0.067	0.690
人に頼るのは好きではない。	-0.152	0.007	0.658
あまり人と親しくなるのは好きではない。	-0.200	-0.022	0.645
私は人に頼らなくても、自分一人で充分にうまくやって行けると思う。	0.150	0.005	0.629
固有値	4.288	2.753	2.133
寄与率(%)	25.2	16.2	12.5

因子1：安定型 因子2：アンビバレント型 因子3：回避型

Table 6 情動的共感性尺度の因子分析結果

	因子1	因子2	因子3
私は贈り物をした相手の人が喜ぶ様子をみるのが好きだ。	0.774	-0.044	0.063
私は友人が悩みごとを話し始めると、話をそらしたくなる。	0.730	-0.062	0.082
私は他人の涙を見ると、同情的になるよりも、いらだってくる。	0.726	0.037	0.242
私は映画を見ていて、まわりの人の泣き声やすすりあげる声を聞くと、おかしくなることがある。	0.677	-0.170	0.053
歌を歌ったり、聴いたりすると、私は楽しくなる。	0.607	-0.131	-0.052
私は映画を見る時、つい熱中してしまう。	0.569	-0.174	-0.002
人前をはばかりず愛情が表現されるのを見ると、私は不愉快になる。	0.466	0.082	0.276
私は身寄りのない老人をみると、かわいそうになる。	0.007	0.819	-0.078
私は大勢の中で一人ぼっちでいるのを見ると、かわいそうになる。	-0.048	0.701	-0.127
私は人が冷遇されているのを見ると、非常に腹が立つ。	-0.268	0.688	0.072
私は動物が苦しんでいるのを見ると、とてもかわいそうになる。	-0.122	0.566	-0.152
私は他人の感情に左右されずに決断することができる。	0.024	-0.034	0.675
私は友人が動揺していても、自分まで動揺してしまうことはない。	0.078	-0.190	0.667
私はまわりが興奮していても、平静でいられる。	0.167	0.100	0.651
私は他人が何かのことで笑っていても、それに興味をそそられない。	0.296	-0.142	0.579
まわりの人が神経質になると、私も神経質になる。	-0.227	-0.248	0.435
固有値	3.874	1.994	1.646
寄与率(%)	24.2	12.5	10.3

因子1：冷淡さ 因子2：同情 因子3：被影響性

Table 7 信頼感3因子における男女差

	男 子	女 子	t 値
自分への信頼	17.048 (4.158)	17.084 (3.897)	-0.055n.s.
他者への信頼	26.887 (5.211)	27.642 (4.582)	-0.956n.s.
不 信	27.726 (9.061)	27.798 (8.197)	-0.052n.s.

() 内は標準偏差

Table 8 信頼感と内的ワーキングモデルとの相関

	自分への信頼	他者への信頼	不 信
安 定 型	0.392****	0.390****	-0.134
アンビバレント型	-0.311****	-0.210*	0.497****
回 避 型	-0.068	-0.128	0.372****

****: $p < .0001$ ***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$

Table 9 信頼感と情動的共感性との相関

	自分への信頼	他者への信頼	不 信
冷 淡 さ	-0.208*	-0.394****	0.387****
同 情	0.090	0.281***	0.042
被 影 響 性	-0.011	-0.183*	0.116

****: $p < .0001$ ***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$ Table 10 内的ワーキングモデルH群、M群、L群における信頼感
3因子の得点の平均値と標準偏差およびF値

安定型

	H 群	M 群	L 群	F 値(自由度)	多重比較(5%水準)
自分への信頼	17.756 (3.511)	17.222 (3.883)	16.245 (4.447)	1.776n.s.	
他者への信頼	27.200 (4.808)	28.079 (4.330)	26.531 (5.409)	1.448n.s.	
不 信	29.364 (9.411)	26.397 (7.281)	28.102 (9.044)	1.638n.s.	

アンビバレント型

	H 群	M 群	L 群	F 値(自由度)	多重比較(5%水準)
自分への信頼	16.020 (4.235)	16.710 (4.131)	18.674 (2.982)	6.033**	L > M、H
他者への信頼	27.000 (5.508)	26.952 (3.981)	28.239 (5.113)	1.117n.s.	
不 信	32.667 (8.682)	27.452 (7.199)	23.087 (7.284)	18.226****	H > M > L

回避型

	H 群	M 群	L 群	F 値(自由度)	多重比較(5%水準)
自分への信頼	17.327 (4.247)	16.787 (3.700)	17.055 (4.016)	0.231n.s.	
他者への信頼	26.800 (5.321)	27.383 (4.387)	27.855 (4.727)	0.653n.s.	
不 信	30.618 (8.323)	28.149 (8.019)	24.537 (8.174)	7.600***	H、M>L

****: $p < .0001$ ***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$

Table 11 情動的共感性H群、M群、L群における信頼感
3因子の得点の平均値と標準偏差およびF値

冷淡さ

	H 群	M 群	L 群	F 値(自由度)	多重比較(5%水準)
自分への信頼	16.049 (4.341)	16.925 (3.647)	17.857 (3.922)	2.661n.s.	
他者への信頼	25.220 (5.734)	26.774 (3.930)	29.206 (4.236)	10.030****	L>M、H
不 信	31.634 (8.303)	28.192 (7.179)	24.905 (8.738)	8.608***	H>M>L

同情

	H 群	M 群	L 群	F 値(自由度)	多重比較(5%水準)
自分への信頼	17.411 (4.592)	17.410 (3.432)	16.053 (3.897)	1.655n.s.	
他者への信頼	28.339 (4.900)	27.787 (4.882)	24.947 (4.329)	6.517**	H、M>L
不 信	29.661 (8.575)	25.803 (8.353)	28.447 (8.205)	3.226*	H>M

被影響性

	H 群	M 群	L 群	F 値(自由度)	多重比較(5%水準)
自分への信頼	17.364 (4.794)	16.565 (3.491)	17.476 (3.827)	0.885n.s.	
他者への信頼	25.864 (5.484)	27.420 (4.641)	28.595 (4.138)	3.563*	L>H
不 信	30.205 (9.100)	27.246 (7.936)	26.024 (8.555)	2.857n.s.	

****: $p < .0001$ ***: $p < .001$ **: $p < .01$ *: $p < .05$

IV. 考 察 と 結 論

青年期における信頼感に影響を及ぼす心理的要因を明らかにするために、本研究は信頼感と内的ワーキングモデル、そして情動的共感性の関連を検討した。その結果以下の事柄が明らかになった。

1) 信頼感と内的ワーキングモデル

信頼感尺度と内的ワーキングモデル尺度の関連を分析したところ、アンビバレント型と自分への信頼、不信、また、回避型と不信との間に有意差がみられた。アンビバレント型得点に関して、H群ほど自分への信頼得点が低く、かつ不信得点が高くなるという結果が得られた。これは、アンビバレント型は他者や外界に対しての近接と不安、抵抗の両価的な表象を有し、自己不全感が強いという特徴をもつことが影響していると考えられる。それは対人関係において不安定で用心深く、過度にネガティブな情動をもち、他人や自分自身を信頼できずにいるためと思われる。また回避型高得点群（H群）ほど不信得点が高く、これは回避型が他者は拒否的で援助が期待できないことから、これを補完するためにきわめて自己充足的な存在という自己に関する表象をもつことが関係していると思われる。そのために、他者と距離をおいて付き合おうとしたり安全感を脅かすものを避けようとし、不信が高まると考えられる。

2) 信頼感と情動的共感性

情動的共感性を各因子ごとに見ていくと、冷淡さ得点が高ければ当然ながら信頼感は低くなっている。冷淡さ因子とは、「他者に対する否定的な感情反応、あるいは無関心な傾向」を測定するものである。Hoffman (1981, 1982) によると、共感性には、その発達区分として他者認知の水準と対応する4段階があるとされている。第1段階は、対人的永続性が獲得される以前（1歳前後）の大まかで未分化な共感である。第2段階では対人的永続性が獲得され始めるが、他者の内的状態を推測しきれないまま、自己の内的状態と混同する共感性となる。そして第3段階になると、役割取得能力の形成と関連して、他者の欲求や感情に基づく共感反応が生じ始める。最後の第4段階では、貧しさや被圧迫感、さらには社会的な弱者への共感が生じるとされる。以上のことから、冷淡さ得点が高いもの（H群）は、何らかの原因で発達段階の課題を遂行できず、他者の感情表現や行動に対していらだったり不愉快になったりしてしまうというマイナスの感情に邪魔をされ、他人を信頼できないという状態に陥ってしまっていると考えられる。

同情因子と信頼感の関連については同情得点が高いH群は他者への信頼が高いことが明らかになった。同情因子とは、「他者に対する肯定的な感情反応」を測定するもので、H群は相手に感情移入し、その人と同じ気持ちになったつもりで相手を思いやり、いたわることができる。したがって、他者を信頼することが容易になるのではないと思われる。その一方で、本研究では、同情得点が高いH群はM群に比べて不信得点も高いという結果が出ている。この結果は、同情H群は他者に対する肯定的な感情をもちながらも、100%相手に感情移入してしまってもよいのかという迷いや不安、さらに懐疑も共存している可能性がある。被影響性因子と信頼感の関連については、被影響性得点が低いL群はH群に比べて他者への信頼が高いことが明らかになった。被影響性因子とは、「他者の感情に反応し動揺する傾向」を測定するものである。

つまり、被影響性得点が低いもの（L群）は、すでに自己がある程度確立されていると思われる、自己を信頼できるからこそ周囲の人々から影響されることなく、安心して他者を信頼できるようになっているのかも知れない。

3) 信頼感3因子における性差

信頼感3因子における性差を分析したところ、どの因子においても有意な差はみられなかった。天貝（1996）の研究によると、他人への信頼および不信に性差がみられ、他人への信頼では男子に比べ女子の方が高く、不信では女子に比べ男子の方が高いという結果が報告されているが、これとは一致しない。この原因はサンプル数によるものなのか、地域差や時代差（8年間）によるものなのかは定かではない。

現代の日本社会では、人間関係がますます希薄になってきているため、なかなか他人との信頼関係を築けずにいる人々が増加している。本研究において、青年期における信頼感に影響を及ぼしていると考えられる内的ワーキングモデルと情動的共感性の関連について検討した。この内的ワーキングモデル、情動的共感性は、発達の初期の段階で徐々に獲得され形成されていくと考えられるため、青年期における信頼感には幼児期の心理的発達も大きな影響を与えていると思われる。

信頼感に関する問題は、我々の日常生活のみならず教育の在り方にも密接に関わってきている。今後は、乳幼児期から児童期を経て青年期にいたるまでの、各発達段階での信頼関係性に及ぼす影響を検討していく必要がある。

文 献

1. Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. & Wall, S. 1978 Patterns of attachment: A psychological study of the strange situation. Lawrence Erlbaum, New Jersey.
2. 浅川潔司・松岡砂織 1987 児童期の共感性に関する発達的研究 教育心理学研究 35, 231-240.
3. 天貝由美子 1999 一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要因 教育心理学研究 47, 229-238.
4. 新井邦二郎・宮腰養・後藤かつ 1995 幼児の主体性の教師評定尺度の作成(2) 筑波大学心理学研究 17, 67-88.
5. Bowlby, J. 1969 Attachment and Loss : Vol. 1. Attachment. Basic, New York.
6. Bowlby, J. 1973 Attachment and Loss : Vol. 2. Separation. Basic, New York.
7. Bowlby, J. 1980 Attachment and Loss : Vol. 3. Loss. Basic, New York.
8. Cynthia, J. G. & Walter, C. S. 1982 Measurement of specific interpersonal trust : construction and validation of a scale to assess trust in a specific other. Journal of Personality and Social Psychology, 43, 1306-1317.
9. Dymond, R. F. 1949 A scale for the measurement of empathy ability. Journal of Consulting Psychology, 14, 127-133.
10. Erikson, E. H. 1955 Childhood and Society. W. W. Norton, New York (仁科弥生訳 1980 幼児期と社会 みすず書房).
11. Erikson, E. H. 1959 Identity and the Life Cycle (Selected papers of E. H. Erikson). Int. Univ. Press,

- New York (小此木啓吾編訳 1973 自我同一性 誠信書房).
12. Giffin, K. 1967 The contribution of studies of source credibility to a theory of interpersonal trust in the communication process. *Psychological Bulletin*, 68, 104-120.
 13. Hazan, C. & Shaver, P. 1987 Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of personality and Social Psychology*, 52, 551-524.
 14. Hoffman, M. L. 1981 Development of moral thought, feeling, and behavior. (依田・宮前訳 道徳性の発達—道徳的思考・感情・行動の発達— 依田 明監訳 現代児童心理学4 情緒と対人関係 金子書房).
 15. Hoffman, M. L. 1982 Development of prosocial motivation : Empathy and guilt, In Eisenberg, N. (Ed.) *The development of prosocial behavior*. Academic Press.
 16. 粕谷貴志・菅原正和 2001 中学生の内的作業モデルと学校適応との関連 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 第11号 (2001) 137-145.
 17. 粕谷貴志・菅原正和・河村茂雄 2000 中学生の内的作業モデルとソーシャル・スキルとの関連について 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要 第10号 (2000) 91-98.
 18. 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, 2, 33-42.
 19. 菊池章夫 1983 向社会的行動の発達 教育心理学年報 23, 118-127.
 20. 菊池章夫 1984 ふれあいと思いやりの心理 川島書店.
 21. Krebs, D. L. 1975 Empathy and altruism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32, 1124-1146.
 22. Mussen, P., & Eisenberg, N. 1980 Roots of caring, sharing and helping : The development of prosocial behavior in children. (菊池彰夫 訳編 1980 思いやりの発達心理 金子書房).
 23. Rotenberg, K. J. 1994 Loneliness and trust. *Journal of Society and Clinical Psychology*, 13, 152-173.
 24. Rotter, J. B. 1967 A new scale for the measurement of interpersonal trust. *Journal of Personality*, 35, 1-7.
 25. 清水弘司 1979 大学生における性の発達と依存対象について 心理学研究, 50, 5, 265-272.
 26. 首藤敏元 1985 児童の共感と愛他行動 —情動的共感の測定に関する探索的研究— 教育心理学研究 33, 226-231.
 27. 高橋恵子 1968a 依存性の研究Ⅰ：大学生女子の依存性, 教育心理学研究, 16, 1, 7-16.
 28. 高橋恵子 1968b 依存性の研究Ⅱ：大学生との比較における高校生女子の依存性, 教育心理学研究, 16, 4, 216-226.
 29. 高橋恵子 1970 依存性の研究Ⅲ：大学・高校生との比較における中学生女子の依存性, 教育心理学研究, 18, 2, 65-75.
 30. 高橋恵子 1980 男子大学生における愛着, 国立音楽大学研究紀要, 14, 131-142.
 31. 詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度 —成人版愛着スタイル尺度作成の試み— 東京都立大学人文学報196, 1-16.
 32. 戸田弘二・松井豊 1985 大学生の愛着構造と異性交際 心理学研究, 56, 5, 288-291.
 33. 角田豊 1992 共感経験尺度 (EES) の妥当性 —VTRを刺激とした感情内容別検討— 教育心理学研究 40, 178-184.
 34. 渡辺弥生・衛藤真子 1990 児童の共感性及び他者の統制可能性が向社会的行動に及ぼす影響 教育心理学研究 38, 151-156.